

関西ブロックセミナー報告 「子ども達への食の支援活動」

関西ブロックでは2016年11月19日（土）に「にしなり隣保館スマイルゆ〜とあい にしなり☆子ども食堂」を運営されている川辺康子さんからお話を伺い、引き続き、実際に食事の調理など子ども食堂のボランティアを実際に体験してきました。

参加した関西ブロック会員の感想を掲載いたします。



岡村 ヒロ子

「にしなり☆子ども食堂」を切盛りしている川辺康子さんの語り口・まなざしがとてもあたたかい。子どもへの愛情がごく自然に伝わってくる。6年前『子どもの居場所』活動を始めた時に、集まってくる子どもたちの中に食事をしていない子がいた。そのことが「子ども食堂」につながったという。「一緒に食べればいい」そのゆるやかさが素晴らしい。スタート時のびっくりするような子どもたちの振る舞いに目をそらさず、正面から向き合った川辺さんの姿勢は今も変わらない。「食事を作るのが目的ではない。子どもたちを育てることが私の役目」その川辺さんの一言が印象深い。

子どもの6人に1人が貧困といわれる。世間は「子ども食堂」＝「貧困」と捉えがちだ。「子ども食堂」の報道番組でコメントした子どもが両親から「うちは貧乏じゃない」と叱責されたという。「食事が満足に取れていない」ことは必ずしも貧困とは結びつかない。「子ども食堂」に集った子ども達は綺麗な洋服を着て、スマートフォンを操っていた。家に帰っても誰もいない、一人で摂る食事等々、家という囲いはあるが、人として育まれる居場所が家にも地域にもないとしたら、それが本当の貧困ではないだろうか。考えることの多い「子ども食堂」だった。

石田 易司

会場のきれいさにまず驚きました。私の知っている子ども食堂は、みんな貧しいNPOが工夫に工夫を重ねて実施しているので、形の違う机やイスを並べて、ちぐはぐだけれど、そこに温かさが漂っているという感じだったからです。

運営に当たっている川辺さんもふんわりした雰囲気、髪の毛を振り乱して必死で頑張っているという様子が全く見られなくて、場所、人の様子に嬉しくなりました。

善意の人がたくさんいる様子を聞かせていただいて、制度や法律でする福祉でない、心の通った福祉がここにあると実感しました。



長尾 玲子

ボランティア参加として調理をおこなうため厨房にいました。支援として届けられた食料について感じたことがありました。にしなり☆こども食堂の週2回の開催とも主食がパンであることがほとんどなさそうでしたが、パンが多くありました。マヨネーズやドレッシングが業務用で、こどもさんが自分で使うには難しいのではないかと感じました。

支援の食料はこども食堂にとって大きな支えになっていると同時に、それらが無駄にされないよう日々献立を考えられるのは簡単なことではないと感じました。

支援のネットワークが充実して、調整がうまくいくようになるとよいと思います。また自分自身はどんなことでお役に立てそうかを考え続けて行こうと思います。

脇坂 博史

いあー衝撃でした。川辺康子さんの発せられる一言々は、そんな現実があるんだなあーという感じでした。家族からの日常生活での学習がどれほど重要であることか。当たり前の中に埋没しているがゆえに、その環境にない子ども達の生活のし辛さに気がつきにくいのでしょうか。

地域住民同士の声かけ、おせっかい、五月蠅いおっちゃん、おばちゃんをもう一度見直さなければならないのです。翻って、子ども達のみならず、高齢者へ、障がい者へ、在日の外国の方々へ・・・昔と今、社会的障がいの有と無、文化の交流などなど、教え、教えられの関係を積極的に構築していく時代を迎えているのではないのでしょうか。

いよいよ「地域家族」的発想のあり様を問い、考え、試行しながら、一歩ずつ歩みを進めていきたいものです。



川北 典子

お話を聞かせていただき、また、実際に調理のお手伝いや子どもたちとかかわる体験をさせていただき、地域に根ざした子どもの居場所の重要性を強く感じました。地域のおとなが、子どもの育ちを見守り、支援していくためには、確かな土台作りと、継続できる体制が必要です。川辺さんが培ってこられた日々の重みを垣間見させていただきました。

子どもたちが三々五々集まり、それぞれに遊び、「バイバイ、またね」と帰っていく…笑顔や満足げな表情が印象的でした。子どもたちは、どの子も一人ひとり、一日だけの見学者には窺い知ることのできない特別なニーズを抱えているのだらうと思います。けれども、確かに言えることは「ここがあって良かったね」ということ。そして、それは今、どの地域にもそういう子どもの居場所が必要なのだと確信した貴重な時間でした。